

《講演録》愛楽園・澄井小中学校の記憶

比嘉良行氏ご講演の経緯

西原 廉太

2014年9月3日から6日にかけて、沖縄、屋我地にある元ハンセン病療養所、沖縄愛楽園で立教大学文学部キリスト教学科の授業、「フィールドワーク A1」が行われた。ハンセン病をめぐる歴史と現在について文献資料等で調査し、ことにキリスト教との接点、関わりについて明らかにすることを主目的とした。

愛楽園をフィールドに選ばせていただいたのは、何よりも私自身の拘りもあった。金属工学を専攻していた私が、今、神学を専門としているその主要な理由は、何を隠そう、学生時代に聖公会の学生・青年団体であった聖公会 SCM の夏のセミナーで、愛楽園に滞在したことにある。私は愛楽園で初めて、元ハンセン病の方々と出会い、その過酷な人生と、しかし、どこまでも優しい人間性に触れながら、私自身の生き方そのものを問われ、変えられた。

愛楽園「祈りの家教会」の信徒の居宅での聖書研究会は、ある意味、衝撃であった。みなさん目が不自由にもかかわらず、聖書や聖歌を暗唱されていた。「イエスさまという方は、二千年も前から、私たちの傍にいてくださった」。この、ある入居者の言葉が、その後、私を神学の道へと誘ったと言っても過言ではない。

それから30年以上が過ぎ、かつてお世話になった方々の多くが天に召された。祈りの家教会を支え続けてこられた松岡和夫先生も逝去され、今一度、この時に、ぜひ若い学生たちを愛楽園に触れさせたい、という思い

が募った。このような形で愛楽園を訪問できるのは、もう最後になるかもしれない、という思いもあった。22名という想定以上の受講者となったが、津留孝夫司祭がすべてを備えてくださった。かつてのような居室訪問中心のプログラムは組めないので、諸講義が主要な軸となったが、それでも学生たちは、さまざまな顔と顔とが繋がる豊かな出会いを経験することができた。

プログラムのハイライトは間違いなく、愛楽園内にかつて存在した小中学生のための学校、澄井校で長年、中心を担われた、比嘉良行先生のお話であった。比嘉先生の静かな、しかし時に感情の高まった、その証言に、若い学生たちはみな、圧倒され、そして涙した。おそらくこれからも、比嘉先生の言葉は、彼女、彼らの中で、かけがえのない人生の宝物となり続けるであろう。比嘉先生のご講演を実現してくださったのは津留先生である。大変お世話になった津留孝夫先生は、2015年6月21日に思いがけず、主のもとに召された。津留先生の魂の平安とお連れ合いの令子さん、ご家族への慰めを祈ると共に、心よりの感謝を申し上げたい。

(JICE 所員・日本聖公会司祭・文学部教授・文学部長)

- * 比嘉良行先生の講演録は、近年の JICE の活動の一つであるハンセン病に関わる文献収集に基づき、西原廉太先生のご厚意により授業報告書用の記録をお貸しいただいた。感謝申しあげる。
- * 比嘉先生による講演録校正に際して、および「澄井校校歌」資料の提供にあたっては糸数敦子氏にご尽力いただいた。記して感謝する。
- * 講演録には、現在においては不適切な表現があるが、当時の社会状況を映し出すものとしてそのまま使用した。

(編集委員会)